

国語教育 相談室

小 学 校



国語教育相談室
No. 63

光村図書

小学校 国語教育相談室 通巻No.120 定価126円(税込)

2008(平成20)年4月15日発行

発行人=常田 寛

発行所=光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9

電話03-3493-2111

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>

E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp

印刷所=村田印刷工業株式会社

デザイン=秋葉 幹司

特 集

新しい学習指導要領をこう読む

— 基幹教科としての役割と国語科で育てる言葉の力 —

鼎 談 甲斐睦朗・阿部 昇・森山卓郎



おはなし定期便

まあちゃんの笑顔 あさのあつこ

教師力講座 ノートを見ると授業がわかる

書 写 の時間を考えよう

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。
くわしくは、光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>

広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書広報部までご連絡ください。

光村図書



新しい学習指導要領をこう読む

— 基幹教科としての役割と国語科で育てる言葉の力 —

鼎談

京都橘大学教授

甲斐睦朗

×

秋田大学教授

阿部 昇

×

京都教育大学教授

森山 卓郎

新しい学習指導要領が告示されました。

これからの時代に求められる学力とはどんなものか。

国語科が担う役割は何か。

新しい学習指導要領から見えてくるものを、
光村図書小学校国語教科書編集委員の三人の
先生方に語り合っていました。



Contents



新しい学習指導要領をこう読む

— 基幹教科としての役割と国語科で育てる言葉の力 —

鼎談 甲斐睦朗・阿部 昇・森山卓郎

1

教師力講座 ③

ノートを見ると授業がわかる…………… 安田恭子
吉永幸司

10

書写の時間を考えよう ①

どうする姿勢・執筆…………… 樋口咲子

14

おはなし定期便

まあちゃんの笑顔…………… あさのあつこ

18

辛口コラム 一寸苦言

授業改善に立ち向かう その2…………… 一徹国語人

21

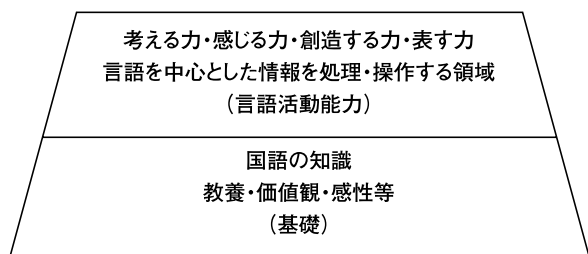
— 小・中学校が連携して授業研究会を開く —



新しい学習指導要領をこう読む

— 基幹教科としての役割と国語科で育てる言葉の力 —

図 1



この二つの領域は、相互に影響し合いながら、各人の国語力を構成しており、生涯にわたって発展していくものと考えられる。
(文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」より)

(図1) が示されました。下の土台を支えとして、上の表現力、思考力といったものを一人ひとりが主体的に高めていく、ということです。**森山** そういう意味では、新しい学習指導要領に、「自分」という言葉、それから「し合う」という表現が何度も取り上げられていることに注目したいと思います。「話し合い」「読み合い」「助言し合い」「発表し合う」また「自分の考えを出す」「自分の生き方について考える」「自分の意見をまとめる」などがあります。さらに「司会や提案をする」など、「学び合い」の中で「自分」の考えを出していく、という学習が明確に打ち出されています。

甲斐 「伝え合う力を高める」ということですね。これは現行の学習指導要領から継承されていますが、それぞれの領域の中でくり返してきます。台形の上下にあるこの二つの力を育成することがPISAの結果から見えた一つの課題であり、新しい学習指導要領でも大きく取り上げられている部分だと思っています。ところで、昨年四月に実施された全国学力・学習状況調査(※3)でも、PISA A型読解力はかなり意識した問題が出されましたね。**阿部** そうですね。B問題がそれですが、例えば、二人の感想文を読んで「共通するよい書き方」を問う問題や、ごみを減らすために「あなたなら、どのような取り組みをしようと思いますか」という設問などは、その典型と言えます。これまでまったくなかったわけではありませんが、国語科教育で弱かった部分が強調されているという点では評価できると思います。**森山** 秋田県はトップクラスの成績だったそうですが、何か特別なことをされているのでしょうか。**阿部** 今、どうしてそうなったのかという分析をしているところです。いろいろな理由が考えられますが、自分の考えを話させたり書かせたりする授業、話し合いや意見交換をさせる授業がより多いということは、質問紙調査の結果を見ても間違いないようなんです。

まずは「間違っていないいいから自分の考えを書いてごらん、話してごらん。」とやって子どもたちに意見を出させ、先生が助言しながら話し合いの中で高めていく、という授業展開をしている先生方・学校が、秋田県は相対的に多かった。

それから、PISAで日本は白紙回答が多かったということですが、全国学力・学習状況調査で、秋田県の子どもたちは、とにかく自分の考えを書くこうしていました。無回答率が低かった。今回の学習指導要領ともかわって、とてもおもしろい結果ではないかと思っています。**森山** なるほど。まさに「し合うこと」と「自分の考えを出す」ことを大切にする実

国語力がすべての学習の基礎

甲斐 新しい学習指導要領を見て、国語科はほとんど変わっていないではないか、といわれることがあります。確かに、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という三領域は変わっていないので、そう思われるのかもしれませんが、実際は大きく変わっています。

阿部 総則の中に「言語に関する能力」が位置づいたという点が新しいし、評価できると思います。国語科はもちろんですが、それ以外の教科でも「言語」という観点を重視することで、より質の高い指導が可能になると思います。

それから、国語科の中でも、これまで「計画的に話し合おうとする態度」などと書かれていたものが、「計画的に話し合う能力」というように「能力」という言葉が前面に出てきたのも注目したいところです。

森山 「国語力」がすべての学習の基礎である、ということが改めて確認されたことの意

義は大きいですね。新しい学習指導要領では、それが具体的な形でいろいろなところに表れていると思います。大きなところでは、言語活動が内容に示されたことと、伝統的な言語文化が入ったことなども注目されますね。

甲斐 今回の学習指導要領は、戦後初めて教育基本法が改正され、それに伴って学校教育法などの教育関連法が改正された後の最初の学習指導要領なんです。その学校教育法の第二十一条五項にも、「読書に親しませ、生活に必要な国語を正しく理解し、使用する基礎的な能力を養うこと」とあり、「国語」という言葉が出てきます。それから、第三十条二項では、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ」とあります。これまで国語科の主要な育成目標に入っていたものが、学校教育全体での課題となっているわけです。

学校教育の枠全体で言語力を育てるということは、社会に出たときに社会人としての言語力が定着するように力をつけていくということだと思います。しかも、これからの社会に役立

学校教育全体で言語力を育てることは、これからの社会に役立つ言語力をつけるということなのです。 — 甲斐睦朗



甲斐 睦朗（かい むつろう）

1939年台湾生まれ。愛知教育大学教授、国立国語研究所言語教育研究部長、日本語教育センター長、独立行政法人国立国語研究所長を経て、現在、京都橘大学文学部教授。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語専門部会主査、文化審議会国語分科会委員。著書に、『わかむらさき—源氏物語の源流を求めて』（明治書院／1998年）、『文学教材の読み方と実際』（明治図書／1996年）など多数。

つ言語力をつけるということですね。このことは、国語科で育てる力の位置づけが質的に変わったということの理解として、押さえておきたいですね。

PISAの影響

森山 今回の改訂をみると、PISA(※1)の影響が強く出ているように思いますが、い

新しい**学習指導要領**をこう読む

— 基幹教科としての役割と国語科で育てる言葉の力 —

身につけたい言語能力が明確になってきた分、教科内容の具体化・体系化・系統化が重要です。

—— **阿部 昇**

践をされた結果だったわけですね。ちょうど、中央教育審議会の答申の中に「知識基盤社会」に対応するとありますが、これからの教育では、技術革新が進む中で、生涯にわたって学習を続けていくことが求められています。伝え合う力、自ら考える力、自ら学んでいく力というものが、これまで以上に大事になってくるわけです。

そういった学力観・教育観のある意味の転回点にわたしたちがいるということを考えれば、PISAにせよ、全国学力・学習状況調査にせよ、表面的な結果の点数にだけこだわるのではなく、社会に出たときに社会人としての言語力が定着するような学習をどう積み上げていくかということが大切だという気がしてきます。新しい学習指導要領でも、そうした根本をおろそかにしてはいけなishようね。

増えた言語活動

甲斐 少し具体的な話になりますが、新しい学習指導要領では、領域ごとに言語活動例を設け、数も増やしています。それが、ア、イ、ウ、エと分類されて、例えば中学年のアを見ると、読むことでは「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。」で、書くことでは「身近なこと、想像したことなどを基に、詩

をつくったり、物語を書いたりすること。」というように系統性を重視している。これも大きく変わったポイントですね。

阿部 「新聞を読む」「伝記を読む」など、かなり具体的な内容になっています。「討論をする」「比べる」など、PISA型読解力の視点も、よく読むとあちこちにちりばめられています。中学校では、「評価」「批評」という言葉も出てきています。しかし、その要素は、もう少し前面に出してもよかったのかな、とも思います。

甲斐 光村の中学校三年の教科書に、新聞の読み比べの教材「新聞の特徴を生かして書く」があります。同じ題材を扱った記事でも、新聞によって切り口が違う。そういう批判的な読みの視点をもってほしいですね。今、全国でNIE（*4）の活動が広がっていて、とてもいいと思っています。新聞を読むのも、読書の一環ですからね。

森山 クリティカル・リーディングですね。高学年の「読むこと」のイとカの二箇所に「比べて読む」が出てきています。

新しい学習指導要領では「事実と意見」というところが現行のものに比べて強調されていると思います。新聞を読むという活動をするときにも、何が事実でそれがどう編集されている、自分がどう思うのか、というように、しっかりとしたものの方をつけていくこと

阿部 そうですね。そんなに高度である必要はないですが、音読をしながら、ここはちょっと強く読まなければいけないとか、ここはこの区切るんだとかを考えさせていってほしいと思います。そのためにも、古典のおもしろさに気づかせることが大切です。解釈をしながら音読上の発見があったり、またその逆もあつたりするような授業構築が必要ですね。

甲斐 「伝統的な言語文化」にどのように触れさせるとよいか、ということが大切になってくると思います。音読だけで終わらない、しかし訓読注釈型でもない古典の教材をどう構築するのが問われていると感じています。とにかく小学生が音読して朗読して暗唱して、大人になったとき、それがその人の人間性や人格を支える要素の一つになってくれるといいなと願っています。

言語そのものについて考える

甲斐 「指導計画の作成と内容の取扱い」2の（1）ウ（イ）には「当該学年より後の学

が問われます。言語活動例が具体的になった分、その活動の中でどういう力をつけるのか、というところをしっかりと押さえていく必要があります。

阿部 おっしゃるとおりです。例えば、グループで話し合わせればいいんだと思って、たくさん話し合わせる。そこで意見を述べ合って、「いっぱい話し合えたね、みんなで意見を述べ合えてよかったね。」で終わってしまう危険がある。でもそうではないのです。やはり大切なのは、その活動でどんな力をつけるのかという教師側の方略です。それがなければ、一体何を学んだのかわからないという授業が生まれてしまう。身につけたい言語能力が明確になってきた分、それにかかわる教科内容の具体化、体系化、系統化ということが重要です。

学習指導要領はあくまでも要点にすぎませんから、国語教育にかかわっているもの全員で、今までとは違う新しい発想や、表層だけでなく深層にまで立ち入るような具体的な教科内容を構築していく必要があります。その中でも文章を吟味し評価する力はきちっと位置づけていかなければならないと思います。

音読を超えた古典の学習を

甲斐 今回、「伝統的な言語文化と国語の特

年に配当されている漢字及びそれ以外の漢字については、振り仮名を付けるなど、児童の学習負担に配慮しつつ提示することができること。」とあります。これは交ぜ書きをなくしていくということもありますが、小学生でも常用漢字が読めるようになれば、新聞や中学生の読み物などに臆せず正面から向かうことができるようになるということがあるのです。

阿部 昇（あべのぼる）

1954年東京都生まれ。茗溪学園中学校・高等学校教諭、秋田大学助教授を経て、現在秋田大学教育文化学部教授。秋田大学教育文化学部附属小学校校長。専門は文章吟味力の指導に関する研究、メディアリテラシー教育、文学作品・説明的文章の読み方教育。著書に『文章吟味力を鍛える-教科書・メディア総合の吟味』（明治図書／2003年）、「授業づくりのための「説明的文章教材」の徹底批判（授業への挑戦）」（明治図書／1996年）ほか多数。





新しい学習指導要領をこう読む

— 基幹教科としての役割と国語科で育てる言葉の力 —

活動が表面的なものにならないためには、「方法への意識」が大切だと思います。

—— 森山卓郎

森山 おっしゃるように、そういう漢字というのは、基本的に語単位でとらえるべきものですから、一部の漢字だけを平仮名にするとかえってわかりにくくなります。社会で生きて働く力になるという点でも、理解を深めるという点でも、今回振り仮名を付ける表記になることは非常に大きいことだと思います。

甲斐 それから、「メタ言語」（*5）「メタ認識」という言葉を国語教育でぜひとも使っていきたいと思います。小学校一年に、「ものの 名まえ」という教材があつて、果物屋さんに行ったり魚屋さんに行ったりします。魚屋さんで、けんじくんが「さかなをください。」と言ったら、おじさんが笑って「さかなじゃ わからないよ。」と言うのです。魚屋にはタイやサバなどたくさん魚があります。いわゆる上位語、下位語の関係です。「メタ言語」という言葉こそ使っていないが、こういうところからメタ認識が展開しているわけです。

阿部 全国学力・学習状況調査の問題にも、

大切ですが、下の土台になっている部分にある、活動を支えるための知識・技能なども必要不可欠な力です。特に読書活動は土台の部分を柔軟に、幅広く奥行きのある状態に、つまり分厚くしていきます。そのためには多面的にいろいろな本を読んできなくてはなりません。それを支えとして、上部の思考力、表現力も高めていきたい、という考え方だと思います。

阿部 まず下支えになる部分があつて、活用力が高まる、ということはあると思います。が、活用しながら、下支えのこの部分が足りなかった、ということが見えてきたりもします。おそらく両方が相まって、行ったり来たりしながら高まっていくのだと思います。

甲斐 そう思います。「指導計画の作成と内容の取扱い」に、図書館の利用について、「本の題名や種類などに注目したり、索引を利用して検索をしたりするなどにより、必要な本や資料を選ぶことができるように指導すること。」と記されたところがあります。自分で求める本を探せるようになるという、これは読書において大きな力になるわけです。阿部先生がおっしゃったように、活用力を高めることによって土台ができてくる、ということがある。まず土台ありき、と考えるのではなく、主体的に書くことや、読むことに積極的に向かっていくということが大切だと思います。

書かれていることを対象化して、メタ的に解釈したり評価したりするような問題がありました。言語力育成協力者会議で、小学校英語でメタ認知力をつける、という議論がありましたが、国語でこそつけていきたい力だと思います。

森山 言語に対するメタ的な考え方はとても大事だと思います。言葉についての意識を高めることで、実生活でも役に立つような思考力や表現力を培うことができると思います。

国語の学力を構造化してとらえる

森山 国語の学力には一定の構造があります。漢字が読めないとか、文の意味がわからないということになるとどうしようもないですから、まずは基盤の学力というものがどうしても必要になります。次に、関連性のあるポイントを記憶しておくとか、相手がどういうことを言いたいのかを予測する、といったコミュニケーションの場での文脈の力が大事になると思います。それから、さらにそれを

多様な活動と方法知を

甲斐 言語活動例は、各領域への関連がともよく系統づけられていますし、全学年を通して見たときも、体系的に位置づけられていると思います。今後は、それを押さえた上で、具体的につけたい力を明確にしていく必要があります。実は現行の光村の教科書でも、その系統性・体系化はほぼ十分に意識されているのです。でも、それをさらに明確にしていく必要があるということですね。

阿部 もちろん現行版の教科書でも意識されていることですが、それがなおいつそう明確になってくると思います。学年内だけでなく学年間、小学校全体にまで目を配ることが大切になってきますね。小学校一年から中学校三年までの九年間を見通した教科内容を、知識と方法を中心として系統化することを考えなくてはならない。だから、先生方がしなければいけないことは、きつと増えると思います。ですが、ぜひ楽しく豊かで発見のある国語の授業を方略的に準備し、これからの世界を生きていく子どもたちに、本当の意味での国語の力、言葉の力を育てていただきたいと思っています。

甲斐 本当にそうですね。「ごんぎつね」でいうと、例えば5の場面は兵十と加助の会話で、お寺に行くまでは兵十が多弁で、帰りは



森山 卓郎（もりやま たくろう）

1960年京都府生まれ。大阪大学文学部助手、講師、京都教育大学教育学部助教授を経て、現在京都教育大学教育学部国文学科教授。専攻は日本語文法。日本語の奥にあるもののとらえ方や、日本語でのコミュニケーションのあり方などの観点から日本語文法を研究。著書に、『「言葉」から考える読解力—理論&かんたんワーク』（明治図書／2007年）、『コミュニケーションの日本語』（岩波書店／2004年）ほか多数。

自分とのかかわりの中で思考していく、あるいはアウトプットしていく力も大切です。その三つの段階を押さえた学習が、新しい学習指導要領では、それぞれの領域の中で、具体的な活動という形で示されていますね。

甲斐 そうですね。先に述べましたけれども、国語力を台形でとらえています。上のほうの、思考力、表現力などの言語活動能力も

加助が多弁だったとか、それぞれの場面がどんな構成になっているのか、また六つの場面がどんなふうにつながっていくのかといった内容分析ができることが必要になってくると思います。

阿部 おっしゃるとおりですね。「ごんぎつね」は、1から5の場面が、6の場面への布石・仕掛けになっているんです。例えば、導入部分で登場人物の紹介をしているのは、それがあとで生きてくるからなんですよね。それから、ごんと兵十の関係がどう変容していくかがおもしろい。ごんは兵十に対する見方を変えていつているのに対し、兵十は相変わらずぬすつときつねと思っていて、そのすれ違いがどんどん広がっていく。いろいろなところに仕掛けがあるわけです。でも、それを仕掛けとして読む、という観点の指導は意外と少ない。単に心情だけを追いかけるのではなく、作品の書かれ方、仕掛けにアクセスしながら読むことができるようになってほしいと思います。

森山 「読む方法」を身につける、ということですね。「読むこと」に限らず、どの領域でも、活動が表面的なものにならないためには、「方法への意識」が大切だと思います。読み取りの場合にはどんな方法があるのか、書く場合は具体的にどうしていけばいいか、といったことですね。国語は、これまでのや



新しい学習指導要領をこう読む

— 基幹教科としての役割と国語科で育てる言葉の力 —

り方に固執してはいけない。どういう力をつけるのか、そのためには何が必要か、といったことを具体的にしっかりと押さえていかなければならないと思います。

阿部 「読む方法」、そして「書く方法」「話す方法」「聞く方法」を国語科の教科内容として大切にする必要があります。そのためには、やはり言語活動が大事ですね。これまでのような問答型・一問一答型ではない、子どもたちの話し合いや学び合い、討論を豊かに仕組む授業をしていかなければ、方法は身につかない。本当の意味での学力向上には限界がある。ただ、活動主義に陥らないように注意しつつ、周到に準備することが重要だと思います。

甲斐 国語科には、目的が二つあります。一つは、文学作品を読むとか文章を書くといった、その人の人間性や人格という内面的な成長にかかわる学習で、国語科独自のものだと思います。もう一つが言語力を身につけることで、これは学校教育の枠で伸ばしていかなければならない部分だと思います。この二つの目標が相反しない形で融合することが、国語科のいちばん理想的な姿だと思っているのです。その上に、豊かな国語の授業が成り立つのだと思います。

先生方には、新しい学習指導要領を正しく理解してほしいと思います。正しく理解する

【用語解説】

*1 PISA

Programme for International Student Assessment (学習到達度調査) の略称。OECD (経済協力開発機構) が二〇〇年から三年ごとに行っている、義務教育修了段階の十五歳の生徒を対象にした学習到達度調査。読解力・数学的リテラシー (＝知識・能力) ・科学的リテラシーの三分野について調査する。これまで、二〇〇年・二〇〇三年・二〇〇六年の三回、調査が行われており、二〇〇年は読解力に重点が置かれた。我が国は、第一回の二〇〇年から参加しているが、調査結果は回を追うごとにスコア・順位とも低下の傾向にあり、「学力低下」論議の契機となった。

*2 PISA型読解力をどう向上させるかという議論

PISAの結果は学力低下の証拠として大きく報道され、文部科学省では、「読解力向上プログラム」をまとめ、教科の枠をこえた学校教育活动全体を通じてPISA型「読解力」の向上に向けた取り組みを積極的に進めていくことを表明した。また、中央教育審議会教育課程部会では、人間力の向上を図る教育内容改善の基本的考え方として、言葉や体験などの学習や生活づくりの重視が提言さ

ために、全体がどういう構成になっているか、また、系統的にどうなっているかをつかんでほしい。例えばひとつの領域の言語活動例のAでもIでもよいのですが、それを低、中、高学年の順に見ていくだけで、全体がどのような扱いになっているかがわかってきます。そのうえで、この言語活動例について、今の教科書の単元や教材を材料として、学習指導の略案を考えていただきたいと思います。

最後に、国語の授業は、(1) 学習指導要領、(2) 教科書、そして、(3) 教室の学習者の三者への配慮によって、よりよい授業に改善されます。教科書は学習指導要領の考えに立脚して編集していますが、それでも各教室で学習指導案を作成される際は、先生方もまた学習指導要領の各事項をひもとく必要があります。教室の一人ひとりの学習者の顔を思い浮かべて、全員が残らず十全な学習ができるよう、楽しく活発な授業案の作成に向かっていたいただきたいものです。

れ、子どもの発達段階に応じた教科等を横断した言語力について検討する「言語力育成協力者会議」が設置された。

*3 全国学力・学習状況調査

日本全国の小学六年生・中学三年生を対象として行われるテストのこと。テストは算数・数学と国語の二科目で、それぞれ主として「知識」に関する問題 (A) と主として「活用」に関する問題 (B) の二種類に分かれている。特に「活用」をテーマとしたB問題については、実践的な問いに対しての対応力が必要とされ、普段の学習の中で疑問に感じたことを納得できるまで考えたり、さまざまな角度から問題を解く方法を考え、自力で解決できる訓練を積んでおくことの重要性が求められた。また、国語では「記述式」の問題が多く出題され、「端的に文章をまとめる」とことや、「要点を人に伝える」などの表現力が求められた。また、同時に、児童・生徒の学習・生活環境について問う質問紙調査も行っている。

*4 NIE

NIE (エヌ・アイ・イー) は、Newspaper in Education (教育に新聞を) の略称。学校等で新聞を教材にして勉強する学習運動のこととて、一九三〇年代にアメリカで始まった。



日本では、社団法人日本新聞協会が教育界に協力する形で、一九八九年から組織的な取り組みを始め、一九九八年に財団法人日本新聞教育文化財団に移管、二〇〇〇年十月には横浜にNIE全国センターを開設し、NIEを推進している。新聞を授業に活用することで、児童・生徒らの学習意欲が高まり、積極的な学習態度が身につくとして注目されている。

*5 メタ言語

言語自体を論じる言語のこと。言葉を使って、言葉について考える能力を「メタ言語能力」という。ここでは、言語そのものを対象とした思考や学習内容について言われている。

ノートを見ると授業がわかる

学びが **残る** **わかる** ノート指導を目ざして

元新宿区立西戸山小学校教諭 やすだ きょうこ 安田 恭子

成績をつける資料にと思って、子どもたちのノートを集めてみたら、漢字の練習と、語句の意味調べばかり。たまに違ったことが書いてあると思ったら、お話の題名と、登場人物の名前。ノートって、これでいいのかな？



いつもワークシートを使って学習を進めています。集めて点検するのも便利だし、何を指導するのかがわかるし……。でも、学習したものが残らないし、せっかくまとめてとじてても、次の学習で見ることはほとんどありません。ほかの先生は、ノート指導をどうしているのでしょうか？

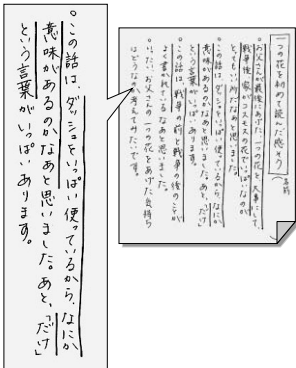


ノートを見ると、学習の流れや、その教材のどこで、何をどう学んだかがわかると言われます。ぜひ、学びの足跡が残る、何を学んだかがわかるノートにしたいです。ノートの事例も示しながら、ノート指導の一例を紹介しましょう。

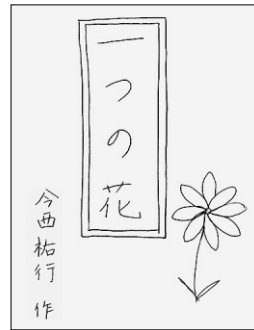


『一つの花』(四下)のノート例

・初発の感想を書いた用紙(回収して教師がチェックしたもの)を貼ると効率がよいでしょう。

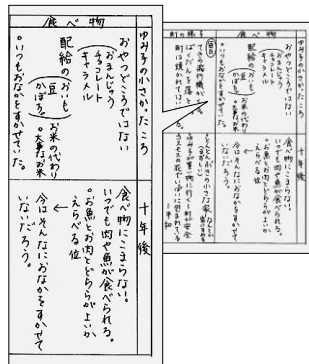


・表紙のページ。題名、作者名は必ず書きます。その子のイメージでイラストをかいたり、色をぬったりしてもよいでしょう。

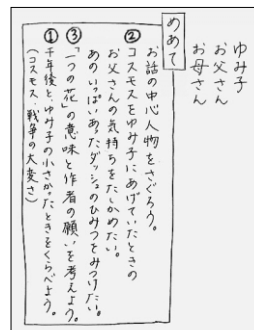


決められた手順にそって
はいるが、各自が自由に書くページ

・ゆみ子の小さかったときと、十年後ではどんなところが違うかを学習した板書を写したノートです。

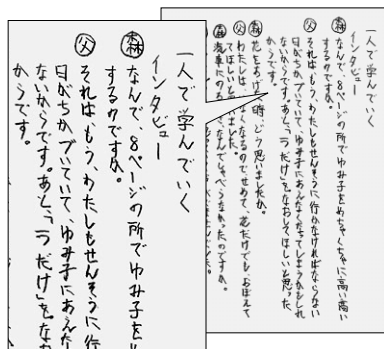


・登場人物の確認をします。学習のめあてを簡条書きにし、学習の流れも相談して記録します。



一斉指導で教師が板書したものを写したページ

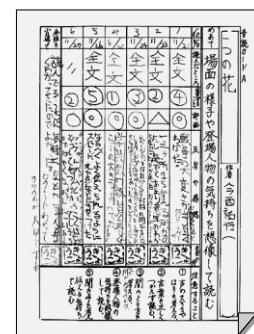
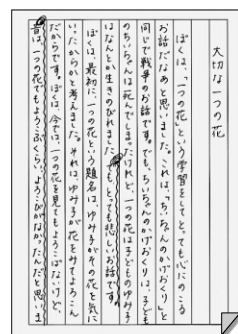
一人学びでそれぞれの児童が自分らしくめあてを追究したページ



・同じめあてについて、二人の児童が一人学びをしたノートです。それぞれの方法で、お父さんの心情に迫っています。



・音読カードや終末の感想文もノートに貼っておくと、学習のまとめが見える形として残ります。



まとめのページ

よりよいノートにしていけるための 4つのポイント



- ①まずは、パターン(型)を作ろう。
- ②板書を写すノートから、児童が「創る」ノートへ。
- ③プリントやカードも、大切な記録。
- ④子どもの遊び心も大切に。

1

例えば、読みの教材のノートは、次のような型はどうでしょうか。

- ・単元名、教材名
- ・初発の感想
- ・めあてや学習計画
- ・読み取りの実際
- ・締めくくりの感想

3

・初発の感想の用紙
・一人学びの振り返りカード
・音読カード

これらは、学習の流れに沿って、ノートに貼っておくとういでしょう。

さらに、資料として与えた全員の感想メモや作者紹介のプリントなども、ノートからはみ出さないように工夫して貼らせたいものです。

2

学習は、一斉指導だけでなく、個別指導を取り入れ、児童が自分でノートを「創る」場をもちます。一人学びに懸命に挑戦し、自分だけの読み取りが残るの、うれしいものです。

叙述の書き抜き、主人公の気持ちの吹き出し書き、作者へのインタビュなど、それまで学んできた方法を生かして、ノート創りをさせましょう。

4

例えば、教材名を書いたページに、好きな挿絵をまねしてかいたり、主人公のせりふを書くときに、主人公の顔をイラスト風にかいて吹き出しをつけたりするなど、その子その子の遊び心も大切にします。

そこでおすすめが白紙のノートです。大切な言葉を大きく書いたりするときも、ます目や野線にとらわれずノートが創れます。

最初だけでなく最後まで丁寧なノートを

京都女子大学教授 吉永 幸司

(1) 「よい授業でしたか」と問われたら

授業を終えて職員室へ戻った時、「今日の授業はどうでしたか。」と尋ねられたら、ためらうことなく「よい授業でした。子どものノートを見て下さい。」と言えたらいいなと思っている。ノートを見れば授業の善し悪しがわかるからである。

(2) ノートを教科書・板書とかかわらせる

よいノートにするにはどうしたらよいのだろうか。教科書・板書とノートの関係を学年ごとに考えてみたい。

低学年では、教科書に出てくる大事な言葉や文を黒板に書く授業が多くなる。それは、できごとの順序や登場人物、大事な語や文に注目させたいからである。文字を大きく書いた絵を貼ったりするため、板書はどれも大事であり、丁寧に黒板をノートに写すという活動に時間をかける必要がある。

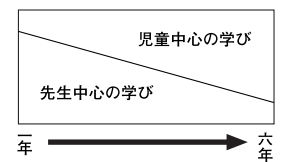
中学年では、大事な語や文は何かということから、語や文の関係がどうなっているのかということを経教科書から見つけて板書する。また、話し合いで話題になったことを次々と板書することもある。教科書の語や文と内容が入り交じってくるため、ノートには、自分の考えと比べて、同じ内容や違うところを見分けながら書いていくように指導する。そうすると、板書を参考にして、自分の考えが残るノートになる。話し合いながら書き加えたり、記号を使って関係を見つたりするのである。

高学年では、教科書の文章を写し、大事なことを抜き出したりする活動を増やすと、ノートが引きしまってくる。発問と答えという問答中心の授業から、自分の考えを大事にする授業に変えることで、ノートの占める位置が大きくなっていく。板書と自分のノートを比べて、教科書を読み直し、確かな考えを作りあげようとする活動が増えるのである。

ノートのどのページにも、それぞれの時間の真剣な学習の跡があるようにしたい。そのためには、ノートに書く時間を授業で確保することが大事である。宿題に任せるのではなく。



ノートを児童一人ひとりのものにするためには、学習それ自体にも個の学びの部分が必要です。右図のように、一年から六年に進むにしたがって、先生中心の指導から児童が主体的に学べるように学習を組み立てるとよいでしょう。



何事も、初めからうまくできるわけではありません。繰り返しの指導の中で、一つのパターンにつけ加えたり、省略したりもして、その子その子のノートになるのです。

さらに、今までの記録がノートに残っているからこそ、次の学習に役立つのです。ときにはノートコンテストをして、互いのノートを見合うのも、よいノート創りに役立ちます。

どうする姿勢・執筆

― 筆記具を正しい姿勢で
正しく持って適切に動かす ―

千葉大学准教授 樋口 咲子

筆記具をどんな姿勢でどう持ってどう動かしたらよいか。今回は、それらを正しく理解し身につけさせるために、児童がもつともよく使用する鉛筆を取り上げて説明していきます。

1 文字を書くときの体の位置

正しい姿勢がとれないと、体がゆがんだり、視力低下を引き起こしたり、字形を斜めの位置から認識しようとする癖がついてしまふ、などの問題がでてきます。正しい姿勢にするために「唱え歌」(※1)を活用しても、文字を書く前はよい姿勢なのに、書き始めたときに姿勢が崩れてしまつて困る、という声を聞きます。その原因の一つに、文字を書くときの利き手の位置があります。右利きの場合、文字は右目の前、つまりおへその位置から右6cm位のところで書くと、正しい姿勢がとりやすくなります(図1)。しかし、書く位置が左側になればなるほ

ど、体が左へ曲がったり、のぞき込むような姿勢になってしまいます(図2)。もちろん、鉛筆の持ち方が悪くても、指が邪魔をして鉛筆の先が見えず、左側からのぞき込む姿勢になってしまいます。

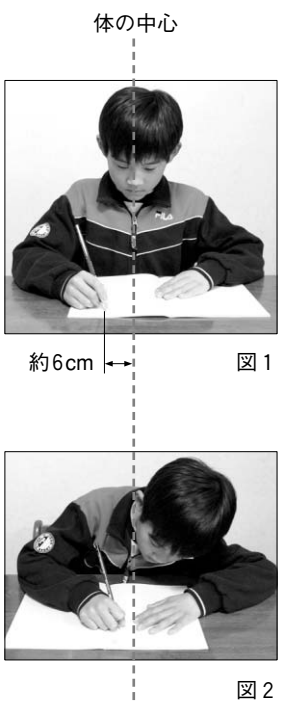


図1

図2

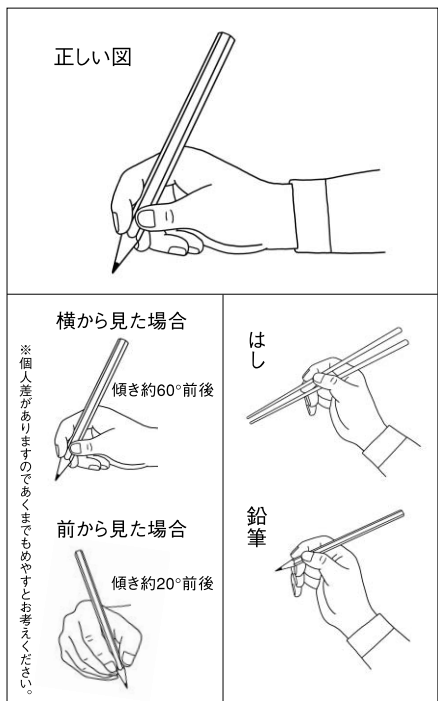


図3

2 正しい鉛筆の持ち方

鉛筆の持ち方は、箸の持ち方と関連づけて指導されることがあります。箸の、下の一本を抜き、指の位置を下方にずらし、持つ角度を整えると、正しい鉛筆の持ち方になります(図3)。正しい鉛筆の持ち方とは、手指に負担がかからず、どの方向にも線が書きやすい持ち方のことです。

鉛筆を持つときは、指で軸の上部と下部の二点を支えています。

このとき、指先で持っている下部には注意がいくのですが、上部の位置は意識が向きにくいものです。上部は、鉛筆の軸を人さし指に沿わせるように持つので、人さし指の付け根の第二関節と第三関節との間で支えることになります。

上の絵は、小学二年生が描いたもので、

指の位置をよく観察して描いています。「これはかおりちゃんの持ち方。親指が上を向いています。けんちゃんも親指が中に入つて、みさちゃんも人さし指と親指がすくく曲がついてね、たくくんはなんと人さし指と中指が並んでいます。」

と特徴も説明してくれました。二年生という、増えた書字量に対応するため、持ちやすい個人のスタイルができつつある時期です。ここにもさまざまな持ち方が見られます。「ところで、みんなの鉛筆の軸の位置はどうだったかな。」と聞いてみると、「あ、そこはよく見てなかった。今度見てみよう。」という答えが返ってきました。後日、上段の絵の右下の持ち方では、図4のように軸の位置が親指の付け根にきていたことを教えてくれました。見落としがちで軸の位置ですが、軸の位置が親指の付け根にきていたとすると、図4のように人さし指と親指が強く折れて、鉛筆がよく動きません。また、それを補うために手全体を動かしますが、微細な動きを調整するために、腕にまで負担がかかり、手が痛くなることもあります。これでは長時間の書写はできません。



図4

教員養成課程の学生でも、上部の位置を認識している人は多くありません。これは感覚として体験してもらつと効果的なので、輪ゴムを使った持ち方の練習(図5)をしてもらっています。今まで体験したことのない人さし指と鉛筆の一体感に、目を輝かせて「おー」という声が上がります。そして、すぐに文字を書くことを試したがりです。すると、今度はがっかりしたように、「書きにくい、これでは数字も書けない」という声が聞こえてきます。指先を動かして文字を書いたことがないので、固く持つて手首全体で書いてしまい、指先の微細な動きを調整する指の力が育っていないのです。

3 正しい鉛筆の動かし方

せっかく正しく持つことができて、正しく動かさなくては意味がありません。では、正しい動かし方とは、どのようなものでしょうか。指を固めて筆記具を持ち、手全体を動かすのではなく、指の関節を屈伸させて指先を動かす（手首を支点として多少手も動く）ことです。そして、線や点画を書くときに、上から下への縦方向は人さし指、左から右への横方向は親指、下から上へのねは中指が主によく働く、と意識することが大切です。最近では、次に示す大学生の書字例のように、叩きつける書き方が多くなっています。

鉛筆の持ち方をチェックして、正しくできていたら○をつけましょう。

	○正しい持ち方(▲は正しくない持ち方)	チェック
軸の位置	○人さし指の第二関節と第三関節の間。 ▲親指の付け根	
指の状態	○親指の腹、人さし指の腹、中指の第一関節の三点で均等に支えている。 ○削り際に人さし指と中指、それより上に親指が位置している。 ▲二本がけ。 ▲親指が上を向いている。 ▲親指を握り込んでいる。 ▲親指の側面で支えている。 ▲親指が前に出ている。	

表1 鉛筆の持ち方チェックシート

元気に過しています。

この書き方は、左斜め45度（十時半の方向）から入筆せず、始筆の入筆角度が、逆入筆（○印参照）になっていることが特徴的です。平成18年度の千葉大学教育学部の学生と千葉大学教育学部附属中学校の生徒を対象とした調査では、このような書き方が中学生では1%、大学生では20%にみられました。（※2）七年近い年齢差のことですから、世代間の問題というより、動かし方の悪いくせが、書字量が多くなり個人の書字リズムを獲得していく中で表れてきたものと考えられます。適切な書字リズムの形成のためには、入門期から正しく筆記具を持って、正しく動かすことが重要なのです。

【参考文献】

- ・高島 諭『だれでもできる幼児・児童の書き方指導硬筆編』（あゆみ出版）一九九四年
- ・樋口咲子他「教員養成課程学生の鉛筆の持ち方に関する考察」『書写書道教育研究第18号』82頁～91頁（萱原書房）二〇〇四年
- 【補注】
- ※1 光村図書「しよしゃ 一ねん」3頁参照
- ※2 樋口咲子「書字過程に注目した行書指導に関する考察」教員養成課程の学生の硬筆における書字リズムの実態を手がかりに」第47回全日本書写書道教育研究会東京（杉並）大会研究集録63頁～69頁（文書館）二〇〇六年

【輪ゴムを使った持ち方練習法】



③ 鉛筆を入れる。



① 輪ゴムを二重にする。



④ 下部の指の位置を整える。



② 人さし指の付け根にはめる。

図5

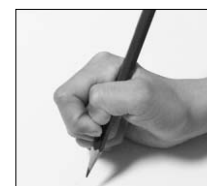


図10



図7



拡大図

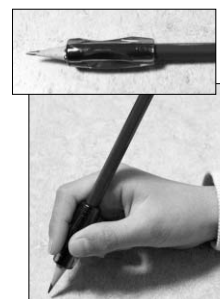


図11



図8



図9

の指の腹でつまむという関係にならなくてはなりません。それができていないと、鉛筆の可動域は狭まり、もしくは固定してしまいうため、手首や腕全体に力が入り、疲労の度合いが高くなります。市販の練習具として、指の位置を確かめながら三点をしっかりと持つことを認識させるゴム状のグリップ（図11）などがありますので活用してもよいでしょう。また、表1のようなチェックシートで自分や友達を持ち方をチェックするのも一つの方法で、理解が深まると、日常からお互いに気をつけ合うことができるようになります。



まあちゃんの笑顔

あさの あつこ

真由菜は、走っていた。必死に走っていた。

わたし、なんで、こんなに走っているんだろう。

なぜ？どうして、止まらないの。助けて、だれか助けて。

叫ぼうとして口を開けたとき、足の下にぽかりと穴があいた。

落ちていく。穴の底へとまっ逆さまに落ちていく。

目が覚めた。白い天井が見える。青いチェックのカーテンも見え

る。まちがいなく、真由菜の部屋だ。時刻は、もうすぐ午前七時になるところだった。いつもの起床時間より三十分も早い。だけど、もう一度、ふとんにもぐりこむ気にはなれなかった。

ため息をついていた。ため息をつくとき涙がこぼれそうだった。

ひどいことをしちゃった。花歩ちゃんにひどいことしちゃった。

昨日の放課後、真由菜は、花歩ちゃんのくつ箱に手紙を入れた。

それは、とてもいじわるな手紙で、中には「死ね」とか「バカバカ、バイキン女」とか「学校にくるな」といった、汚い言葉が書きつらねてある。そんな手紙を花歩ちゃんのくつ箱に入れたのだ。

「真由ちゃん、入れてきてよ」

光子ちゃんに言われた。手紙を書くように言ったのも光子ちゃんだ。

破いたノートに、光子ちゃんや久美恵ちゃん綾美ちゃんたちがいろいろないじわるな言葉を赤鉛筆や黒のボールペンを使って書いた。その後、光子ちゃんが真由菜の前に、ノートを差し出したのだ。ノートは、お葬式の写真みたいに黒くふちどられていた。ぞっとした。

「真由菜ちゃんも、何か書いてよ」

「え……でも、わたし……」

「花歩ちゃん、むかつくでしょ。ちよつとだけこらしめてやろうよ」

光子ちゃんは、真由菜に向かって片目をつぶってみせた。光子ちゃんのことは嫌いではない。はきはきしていて、頭もよくて、親切なところもある。去年も同じクラスだったけれど、体育の時間、転んでケガをした真由菜を保健室まで連れて行ってくれた。その日の下校のとき、家の近くまで真由菜の荷物を持って送ってくれた。優しいのだ。でも、気が強くて、誰かに負けることがまんできない。

この秋、市が主催する「小、中学校秋の展覧会」に学校の代表

花歩ちゃんは手紙を読んでもすぐ、顔をゆがめた。くしゃり。そんな音が聞こえそうなほど、強くゆがめた。涙がもりあがり、コンクリートの床にぼつん、ぼつんと落ちていく。とても辛そうな顔だった。目にやきついている。

真由菜はベッドから出て、窓のカーテンをあけた。鳥の音が聞こえる。空は青く、うすい雲がベールのように広がっている。そのうす雲をつらぬいて、朝の光がきらきらと地上にふりそそいでいた。とてもきれいな秋の朝だけれど。真由菜の心は重い。重すぎて、うまく息ができないほどだ。花歩ちゃんの顔を見るのが苦しかった。

どうしよう……。

そのとき、ふつと思いついた。あの絵、花歩ちゃんが誕生日のプレゼントにくれた絵。あれ、どうしただろう。急にあの絵が見たくなった。どうしても、見たい。

机の一番下の引き出しをあける。『たからもののはこ』と、ひらがなで上書きしてある白い箱があった。写真とかビーズのアクセサリーとか、人形とか、昔大事にしていた『たからもの』が、二杯入っている。

「あった」

赤いリボンでくくられた画用紙があった。真由菜の顔だ。画用紙いつぱいの笑い顔。小さなころの真由菜が笑っている。耳の下で切りそろえた髪型の真由菜、すごく楽しそうに笑っている真由菜。前歯が二本、ぬけている真由菜。後ろにはいろんな花が咲き乱れている。色だけじゃなくて、花の形もちがっていた。絵の中から、笑い声がこぼれてきそうだった。花の香りがただよってきそうだった。

わたし、こんなにすてきな顔で笑っていたんだ。こんなに明るくて、楽しそうに笑っていたんだ。

まあちゃん。花歩ちゃんの声が聞こえた。

として、光子ちゃんと花歩ちゃんの絵が出品された。そして花歩ちゃんの絵は、みごと最高の「市長賞」に選ばれたのに、光子ちゃんの作品は佳作にもならなかった。朝礼のとき、全校生徒の前で校長先生は、花歩ちゃんのことだけをほめた。だから、光子ちゃんは花歩ちゃんにむかっているのだ。花歩ちゃんみたいな、勉強でも運動でも、そんなに目立たないような子に負けて、悔しいのだ。

でも、でも、それって……花歩ちゃんのせいじゃないよ。

そう言いたかった。花歩ちゃんとは、幼稚園のときから友達だ。花歩ちゃんは静かで優しく、幼稚園のときから絵が上手だった。

「まあちゃんにプレゼント」

一年生のとき、花歩ちゃんは真由菜の顔を画用紙いつぱいに描いて、誕生日に渡してくれた。十二色のクレヨンで丁寧に描いてある。後ろには色とりどりの花が咲いていた。とてもきれいな絵だった。

花歩ちゃんは、今でもたいせつな友達だ。いじわるな手紙なんて書きたくない。だけど……。

光子ちゃんの顔をちらりと見上げる。書きたくないって言ったら、次は、わたしがいじめられるかもしれない。それは……嫌だ。

「真由菜ちゃん、早く」

光子ちゃんの声が少しとがってくる。

「だけど……何て書いたらいいか、わからないし……」

「死んじゃえて書けば。その下にドクロも描いてよ」

真由菜は言われたとおりにした。

死んじゃえ。そしてドクロの絵。

それを花歩ちゃんのくつ箱に入れた。入れた後、光子ちゃんたちといっしょにかけに隠れて、花歩ちゃんのようなすを見ていた。



まあちゃんの笑った顔、描いたんだよ。わたしが一番好きなまあちゃんの顔、描いたの。プレゼントになるかな？

花歩ちゃんは、ちよつと恥ずかしそうにこの絵を渡してくれた。花歩ちゃん……。

その朝、真由菜は四つ角のところに立っていた。ここで待っていれば、花歩ちゃんを通る。花歩ちゃんに会って、謝ろう。

「花歩ちゃん、昨日の手紙、わたしが書いたの」正直にそう言う。それから深く頭を下げよう。「ごめんなさい」って謝ろう。謝ったら、花歩ちゃんは許してくれるだろうか。もしかしたら、怒るかもしれない。「ひどいよ、あんな手紙、書くなんてひどいよ」と、真由菜のことを怒るかもしれない。口をきいてくれなくなるかもしれない。

真由菜は両手を強くにぎりしめた。

でも、謝らなくちゃならない。このまま黙っていたら、二度とすてきに笑えなくなる。謝らなくちゃ、どうしても謝らなくちゃ。

花歩ちゃんの姿が見えた。少しうつむいてゆつくりと歩いてくる。

「花歩ちゃん」

名前を呼んで、真由菜は一步、花歩ちゃんに近づいた。



撮影：長岡博史

あさのあつこ
作家。岡山県生まれ。「バッテリー」で野間児童文芸賞、「バッテリー2」で日本児童文学者協会賞受賞。近著「チウガクセイのキモチ」「ぬばたま」ほか著書多数。



丹地 陽子／絵

辛口コラム 一寸苦言

授業改善に立ち向かう その2

— 小・中学校が連携して授業研究会を開く —

一徹国語人

横浜市では、市としての研究日が小学校は第二水曜日、中学校は第二水曜日であった。それが昨年度からどちらも第一水曜日となり、合同研究会が開けるようになった。

昨年暮れ(十二月十八日)、横浜市立南小学校という学校の授業研究会に参加したところ、水曜日でもないのに近隣の二つの中学校の国語科の教師たちが参加しているのに出会った。南小からのお誘いがあったので、小学校の国語教育を知りたいチャンスだと考えて参加したと言う。どちらの中学校も、南小を卒業した子どもたちが進学している学校である。

「子ども一人ひとりが『語彙力』を身に付け、『読みの力』を高める指導の在り方」をテーマに授業研究を進めていたが、私は、五年生の若い担任教師による「大造じいさんになりきって作品を味わおう」という単元設定の授業を参観した。

語彙力をつけるために読書や音読、ことわざ・四字熟語の学習、辞書の活用といった

いろいろな学習に取り組んできているようで、どの子も学びの方法をそれぞれにもった上でこの単元の学習に立ち向かっているのがよく分かる。今回は、大造じいさんの日記をつけると言う学習を通して、読み進める際のサイドラインの引き方とノートの取り方を深めようとしていた。

授業が終了し子どもたちが下校した後、の教室に、高学年の担任たちと中学校の二人の先生が集まって、その日の授業の目標や展開の仕方について話し合った。

大造じいさんの気持ちを考えるのに残雪の立場からの意見も日記に書いてみたい、と言う児童が出たことについての議論や、「うなぎつりばり作戦とかタニシばらまき作戦」といった『○○作戦』と命名したのは、子ども達の心を教材に引きつけるのには効果的だが、読みがゲーム的になって深まらなくなることもあるから気をつけたい。」という意見、「銃を『撃つ』か『撃たない』かを個々に読み取りした後、そのことでディベート学習し

てみるのも意味がある。」といった意見が出るなど、先生方の活発な発言が続いた。

中学校の先生からは、「『大造じいさんがどうして銃を下ろしたか』というテーマで、時間をかけて読み取り学習をするのはとてもおもしろい。時間のない中学校ではできない、小学校ならではの取り組みだと思う。」「実に丁寧な読みの学習でびっくりした。中学校の授業改善にも大いに参考になった。また、もつとノート記録の時間を増やしスピーディーに記録できるように指導してくれると中学校としては助かる。」といった意見が出ていた。

これまで小学校の教師たちだけで行っていた授業分析だが、中学校の国語科教師を交えて話し合うことによってこんなにも広がり、深まりが得られるのかと、互いにびっくりしていたのが面白かった。

今、横浜市のあちこちで小・中学校合同の授業研究会が静かに広がっているのを、うれしく参観させてもらった。

教科書編集部便り

世代を超えて ―長年掲載されている教材について―

小社「国語」教科書には、親子とともに学んだり、教材を学んだ子どもが大きくなり先生になって教えていたりして、世代を超えて多くの人々に愛され続けている教材がたくさんあります。それらは、「読むこと」の力をつけ、読書の意欲を喚起させる優れた学習材であると同時に、学習者の人間形成にもかかわり、根底で「生きる力」を育てる存在でもあると自負しています。

さて、では現行の教科書教材でいちばん長く掲載されているのはなんでしょう。

平成二十（二〇〇八）年四月現在、小社教科書で三十年以上に渡って掲載されている教材は十三あります。

昭和四十六（一九七二）年、「くじらぐも」「たんぼぼのちえ」「白いぼうし」「ごんぎつね」「やまなし」が初めて光村図書の教科書に掲載されました。

作家中川李枝子先生は、「くじらぐも」を執筆されるにあたって、「何としても一年生にいやがられない、苦痛を与えない、学校きらいにさせない『楽しい話』を書かなくてはならないと肝に銘じました。」（小社学習指導書「一年下より」と強い決意をもって臨まれたそうです。そうして完成された「くじらぐも」は、三十七年間変わらず、全国の教室や家庭で「天までとどけ、一、二、三」という楽しい声を響かせ続けています。

また、昭和四十（一九六五）年、「白い馬」という題名の作品が掲載されました。「白い馬」は、昭和四十九（一九七四）年度版教科書の改訂時に大塚勇三先生が再話し直し、表現、用語にいたるまで克明に

検討を加え、題名を改めて掲載されました。「スーホの白い馬」です。「白い馬」の掲載にあたっては次のような願いがこめられました。「児童の読む物語の多くは、日本、欧米のものである。（中略）この物語によって、草原の国モンゴルにも、変わりのない人と動物の愛情が息づいていることをわからせることができる。」（昭和四十年版小社学習指導書「二年より」）

今でも日本の子どもは多くは、この作品で初めてモンゴルという国や馬頭琴を知ります。そして、物語によって育まれた親しみは一生続くのです。

以上のことから、いちばん長く掲載されている教材は何かといえば、「くじらぐも」「たんぼぼのちえ」「白いぼうし」「ごんぎつね」「やまなし」というのが正解ともいえますし、「スーホの白い馬」が正解ということもできるかと思えます。

ちょうど今、新しい学習指導要領が告示され、これから教科書改訂の作業が本格化していきます。新版教科書がお手元に届くのは平成二十三年四月ということになります。それまでの三年間、これらの教材とともに、いっそうよい授業がなされることを心より願っています。

昭和四十（一九六五）年初出「白い馬」昭和四十九（一九七四）年より「スーホの白い馬」
昭和四十六（一九七二）年初出「くじらぐも」「たんぼぼのちえ」「白いぼうし」「ごんぎつね」「やまなし」
昭和四十九（一九七四）年初出「ありの行列」
昭和五十二（一九七七）年初出「じどう車のなかま」昭和五十一（一九七五）年より「じどう車くらべ」「たぬきの乗車」「スイミー」
「モチモチの木」「二つの花」「わらぐつの中の神様」

広報部便り

研究会のご案内

■愛知教育大学附属名古屋小学校
第55回 小学校教育研究協議会

開催日 平成二十年六月四日（水）

テーマ 「未来をたくましく生き抜くことができる子」の育成をめざして【最終年次】

内容 公開授業（各教科、英語活動、帰国児童教育）
研究発表協議会（各教科、帰国児童教育）
英語活動情報交換会
講演「活動主義から学力形成主義へ ―授業の改善策―」

日本教育技術学会理事・名誉会長
千葉経済大学短期学部講師

野口芳宏氏

連絡先

愛知教育大学附属名古屋小学校
〒四六二・〇〇四七 名古屋市中区大幸南二丁目二二番
TEL 〇五二（七三二）四六一六
FAX 〇五二（七三二）三六九〇
<http://www.np.aichi-edu.ac.jp/>

編集後記

新しい学習指導要領が告示されました。今回の特集では、三人の先生方に、鼎談という形で、その新しい学習指導要領を読み解いていただきました。

お話しの中にもあったとおり、目に見えて変わった部分もたくさんありますが、根底に流れる基本的な理念は現行の学習指導要領と変わらず、それをさらに具体的に発展させたものになっています。移行期間を経、平成二十三年度からの完全実施に向けて、この新しい学習指導要領をどのように理解し、日々の授業にどう反映させていくのか、学校現場でも議論されることと思いますが、今回の特集がその一助となれば幸いです。

また、弊社ホームページ「光村チャンネル」では、新しい学習指導要領について、「識者による解説」を掲載しています。ぜひご覧ください。

ご意見・ご感想、取り上げてほしいテーマなどありましたら、ぜひ広報部までお寄せください。お待ちしております！

FAX 〇三（三四九三）五四八三
E-mail: kofo@mitsumura-tosho.co.jp



平成17年度版小学校国語教授用ソフト 大好評 絶賛発売中!!



光村「国語デジタル教科書」は、
プロジェクタなどの教材提示装置用に
開発された一斉学習のためのソフトウェアです。
全員で同じ画面を見ながら学習することで、
授業に一体感が生まれます。

光村国語デジタル教科書 1~6年

Windows®版

学校フリーライセンス価格：各学年 52,500 円(本体 50,000 円)
※「学校フリーライセンス」は、校内でご利用になるパソコンの台数を制限しない契約です。



「実践活用ガイド」が新しくなりました!
体験版と併せてただいま配布中です。詳しくは下記ホームページをご覧ください。
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>

※Windows®は、米国マイクロソフト社の登録商標です。

光村図書

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
TEL 03-3493-2111 (代表) 03-3493-4742 (直通) FAX 03-3493-5483
E-mail digital-info@mitsumura-tosho.co.jp

児童文学の季刊誌

飛ぶ教室

[2008年・13号] 定価1,000円(本体952円)
今号から、表紙絵は荒井良二さんです。

特集 12歳 世界が変わるとき

巻頭グラビア | 12歳のムネノウチ [写真/梅佳代]

創作 ひこ・田中 / 岩瀬成子 / 川端裕人
椰月美智子 / 小森香折 / 川島誠

コラム 12歳の私へ

公募作品結果発表・入選作掲載

対談 金原瑞人 12歳を語る
松木正子
作家への手紙 [中島京子 / 穂村弘]

4月25日発売

www.mitsumura-tosho.co.jp/shohin/

[ホームページからお買い求めいただけます]

小中一貫教育の先駆的な教育特区品川区と国語の光村図書が共同開発・編集

漢字ステージ100

品川区小中一貫教育 国語科

全3巻: 1・2年生 3・4年生 5・6・7年生 (8・9年生)
定価 各950円(本体905円) B5判横 平均130頁

楽しく学べる工夫がいっぱい。

- 常用漢字1945字を3分冊で学習できます。
- 光村の国語教科書のキャラクター(カンジー博士)や、漢字の手書き文字、教科書体を使うことで、教科書との一貫性を図っています。

